

迷

える
仔羊を

手籠めにして

教祖

になっちゃった話

非常口



おんぼろ

が、私。

はあしい

貴女は

神を信じますか……？





妻鹿みちる、34歳。夫と結婚してから
8年目の小説家

主に書いてるのは官能小説
ありがたいことに毎回重版が
かかるほどには読んでもらえているらしい

ふう

おーい

今日はこのくらいで
いいかなあ…

月23日 木曜日

6:25

しかし半年ほど前に夫は
5年ほどの海外出張が決まり
私も国外は億劫だったために
別居生活が始まった



今のこの生活に不満があるわけでは決していない

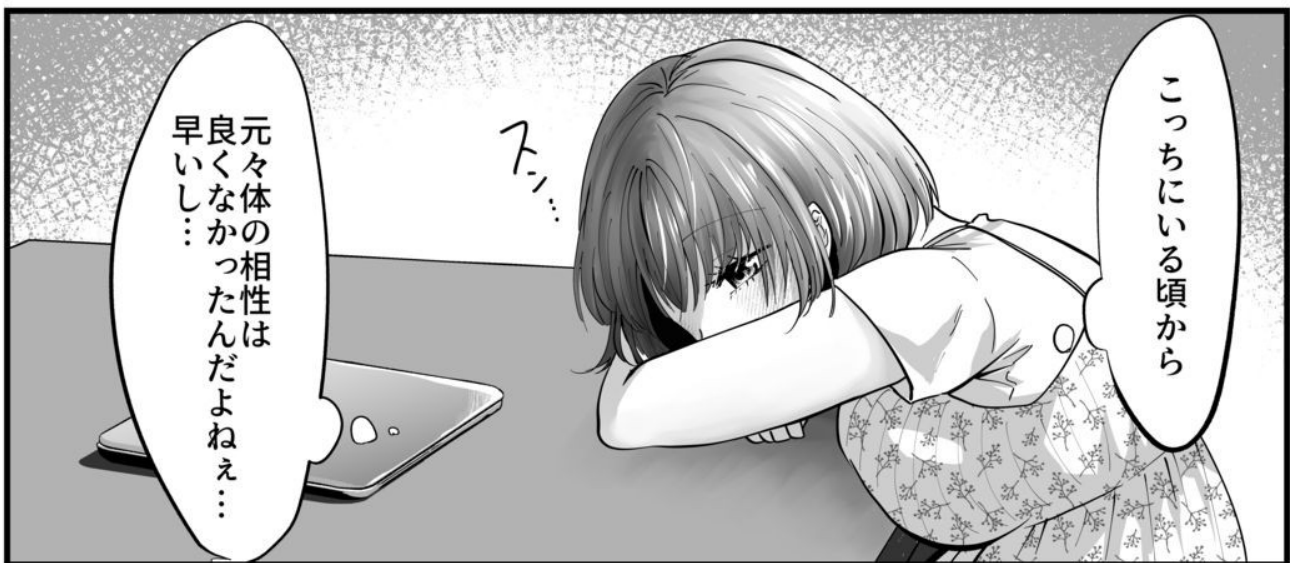


帰ってくるのは年に一度か二度…
夫のことは愛しているけれどでも…



たまには刺激だって欲しくなる
主に体の

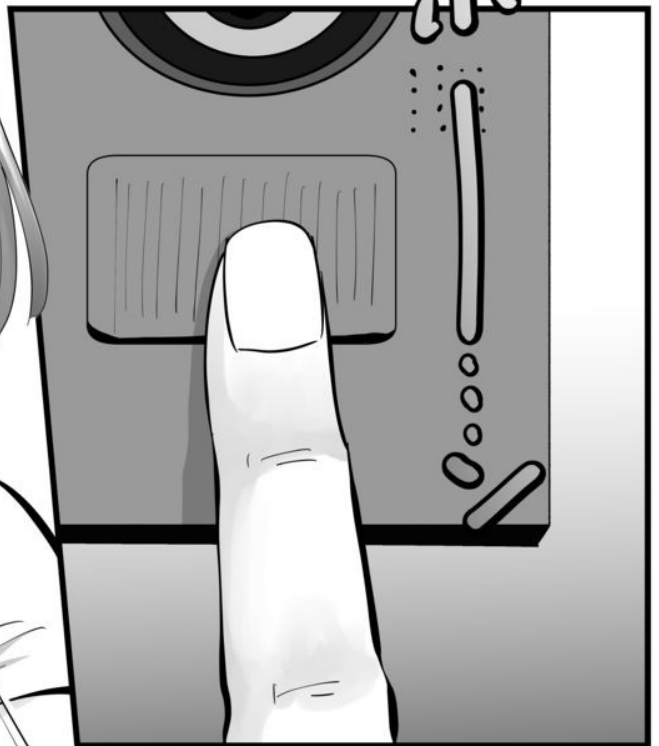
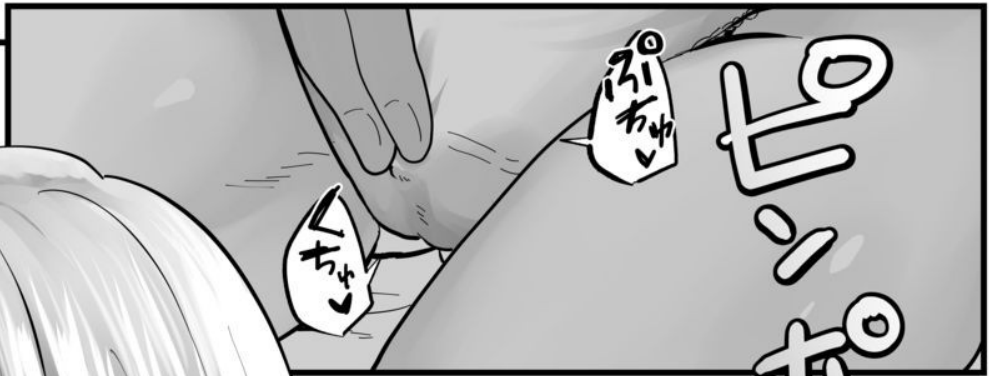
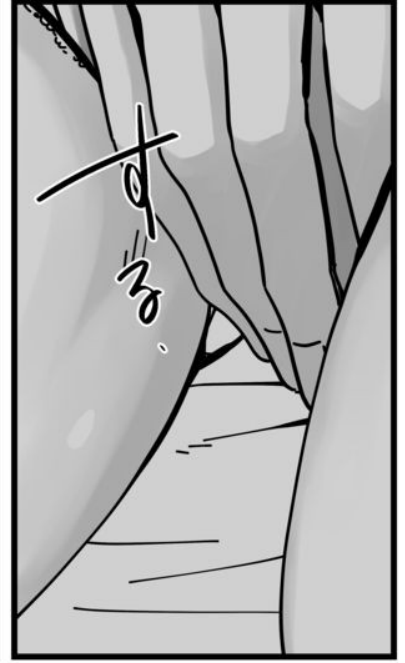
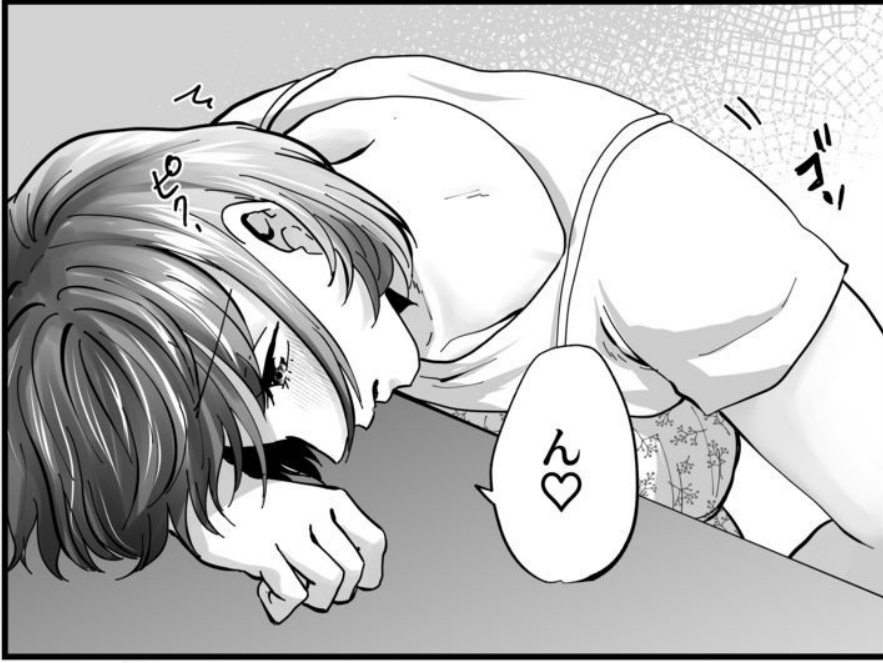
ともくん 早くみちるに会いたい
私のセリフ～
ともくん 愛してるよ
みちる 私ち
A-1.

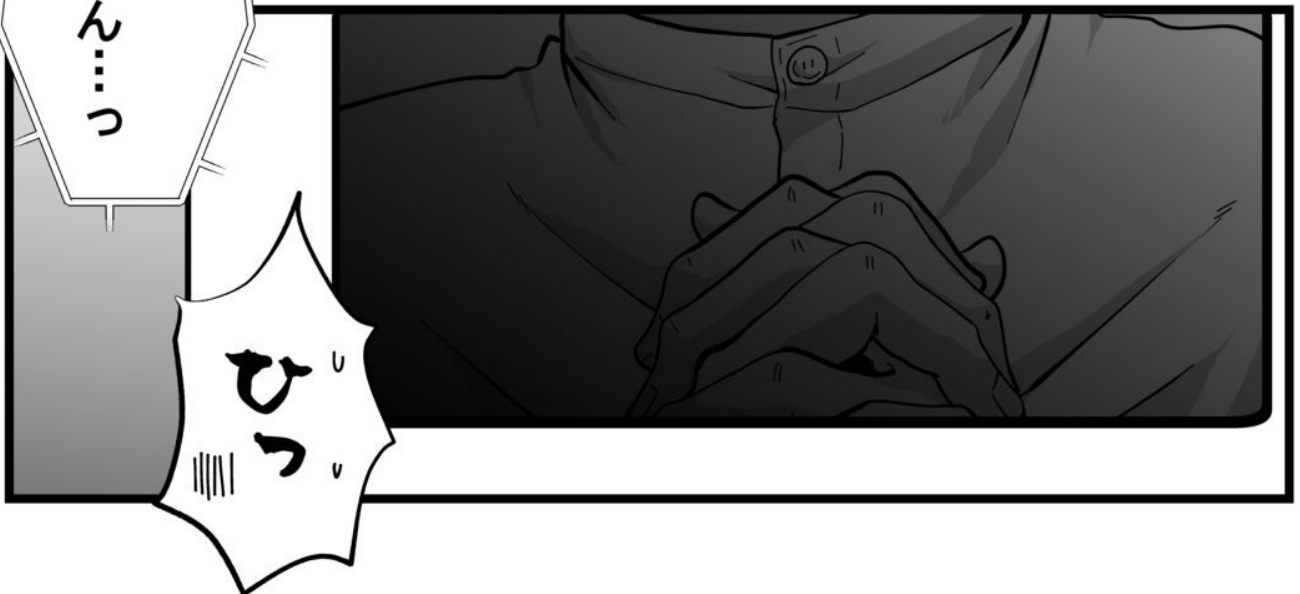


元々体の相性は良くなかったんだよねえ…
早いし…

フ…

こっちにいる頃から







何だろ
勧誘か何かかな？

ちよつとからかって
みよつかな~~~~♡



い、今行きますー

ホ.



信じますか？

貴女は神を

取り敢えず

中、どろどろっ♡

コオ



麦茶でよかった？

あ、や、大丈夫です
…僕、その…



どうぞ



急に引き入れちゃって
ごめんねえ

私いつも一人で
退屈しててね
話し相手になって
くれたら嬉しいし

そちらの
「希望のまなこ」？の
お話も聞かせて
もらいたくって



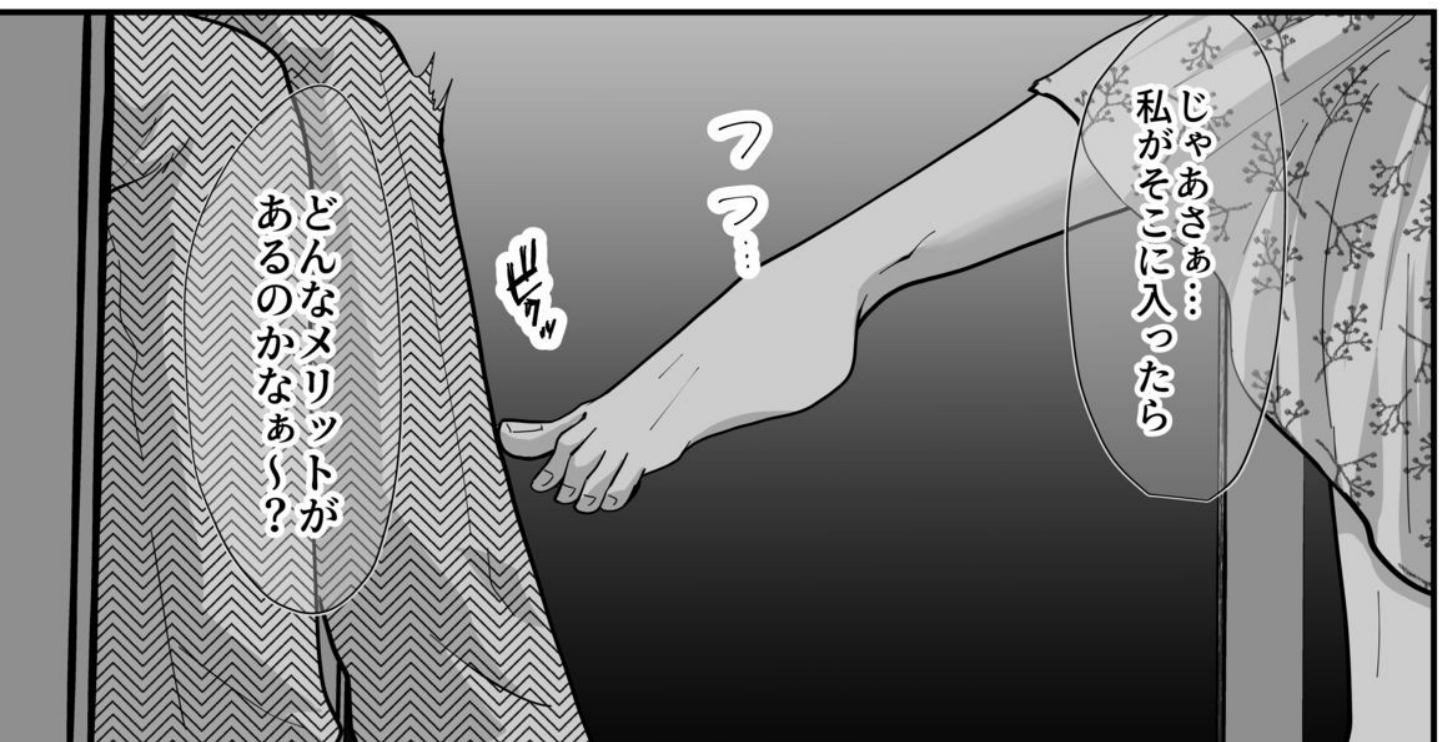
うちの宗教に
興味あるんすね！

う、うちはそのっ
教祖様の出自が
すこくって、です…！



ほま
あ

う、うちのの！





ん？それより
二徹くんは偉いなあ…



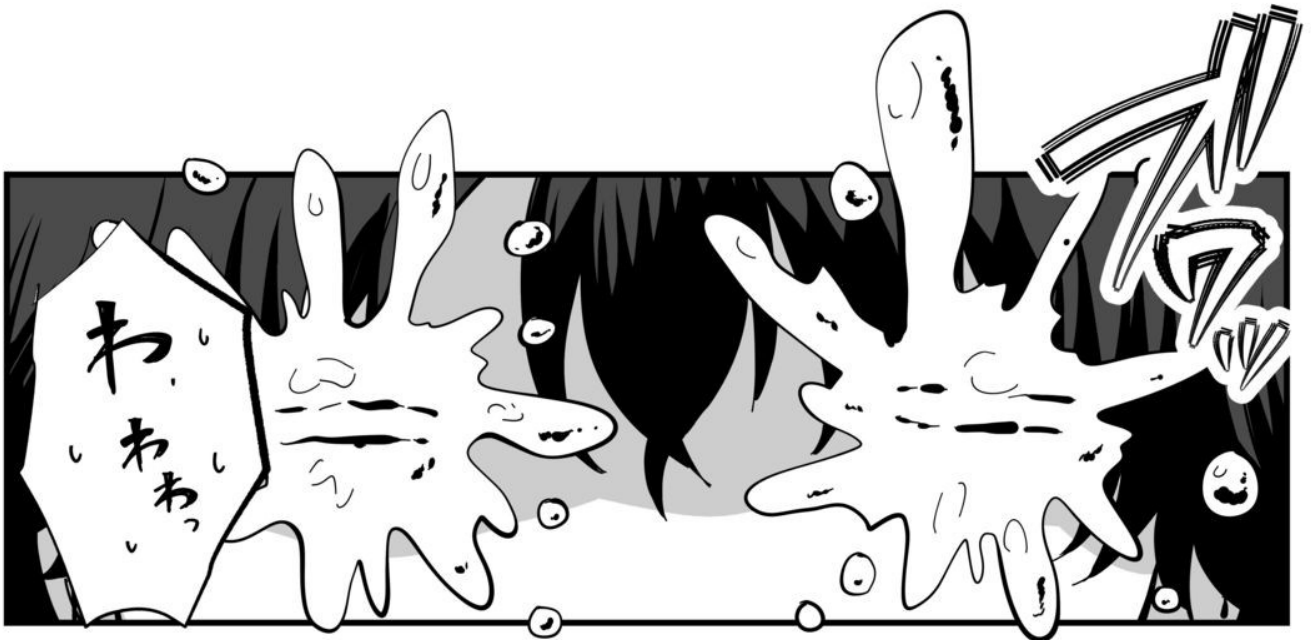
あ、の…
あし…っ

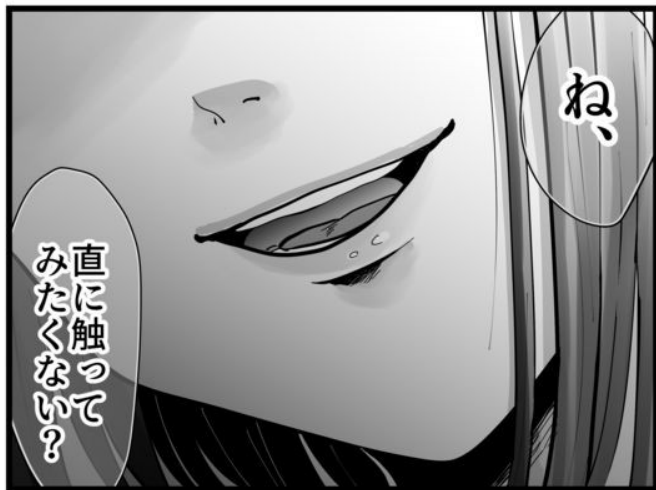


私なんか日がな一日
家で仕事してるだけだもん
毎日そんなに熱心に
お祈りしてるんだもん

私なんか幸せの
お裾分けまでしようと
してくれるなんて

すごい幸せに
なっちゃうね、きつと





ゴクン....



んっ♡ふふ♡
ここに悪い気が
溜まってるから

泣いちゃった
のかなあ♡
ふふ

ぐう♡

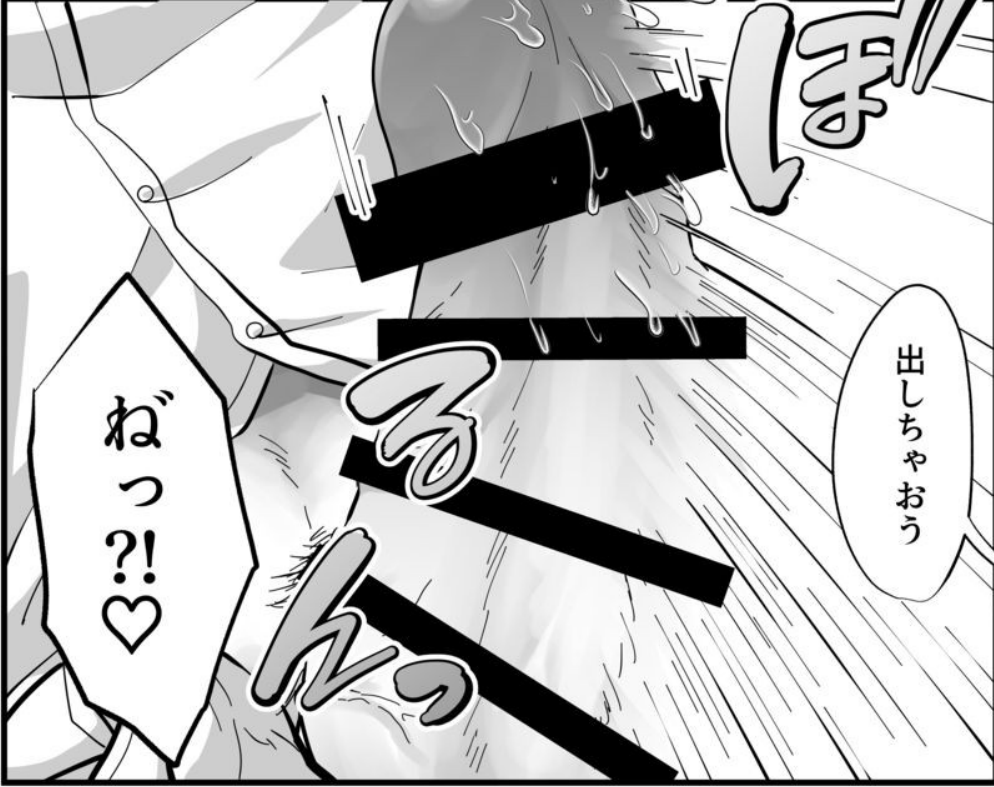
私があくさん
しこしこして



謝んなくて
いいの♡

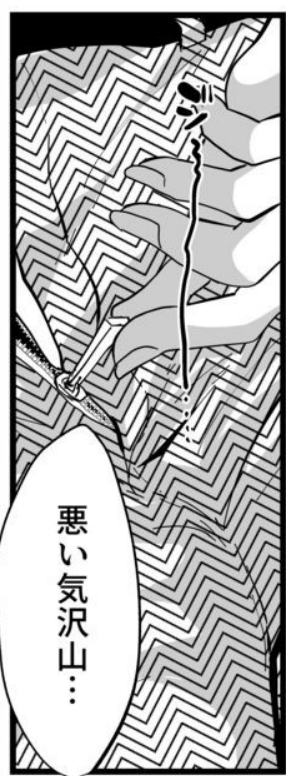
ほら反対側も
ちゅーちゅー
しようね♡

うふ

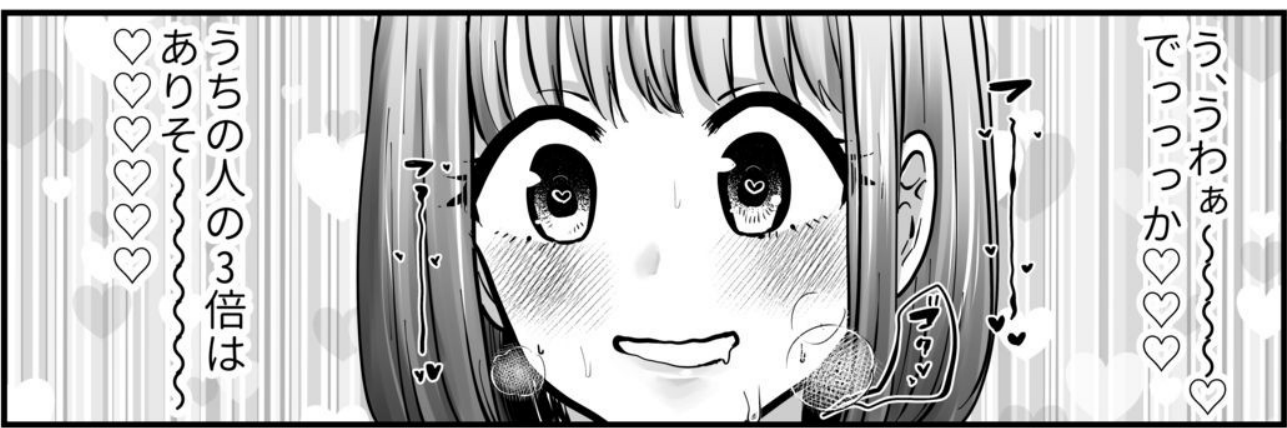


ねっ?!♡

出しちゃおう



悪い気沢山...



うちの人の3倍は
ありそ♡♡♡♡♡♡

うっわあ♡♡♡♡♡
でっっっか♡♡♡♡♡



っはあ...♡

ぼ、ぼくの...道が
みつかんねえのも...



くっさくて
濃いねえ...♡

これはまだまだ
悪い気が溜まってるのかなあ？



あ、♡

陰口、う♡
言われんのも♡



そう♡

ここに溜まった
悪い気のせい♡



ぜーんぶ悪い気が
溜まってるせい♡

♪♪♪♪♪



毎日祈っていたのは



もしかしたら



妻鹿さんに出会う為の
修行だったのか?!

ということとは:
今のこの儀式は:

あーった♡

教えであり
試練なのか...?!!





謝らなくて
いいよ♡

…あ、これで巻いたら

もーっと悪い気が
出てくるかも♡



そ、それはっ！

教祖様から直々に
洗礼を受けた…

そうなんだあ♡

じゃあいつぱい
効きそう♡♡

ほーら、ぶくー♡って
してきてるねえ♡
出そう？

びりびり
当たる♡♡



もっとキツく絞めてほしい？

やー♡いやっ

ぎもぢい、けど出せない…っから

は、はず、外してっ♡

お♡♡♡



んふ♡♡濃おいい♡

ひづ♡♡♡

んー？なあに？数珠きもちー？

ち、ちがっ♡

お♡♡♡



何のためには時間とお金かけてるの？

分らないなら入る気…失せちゃうなあ…

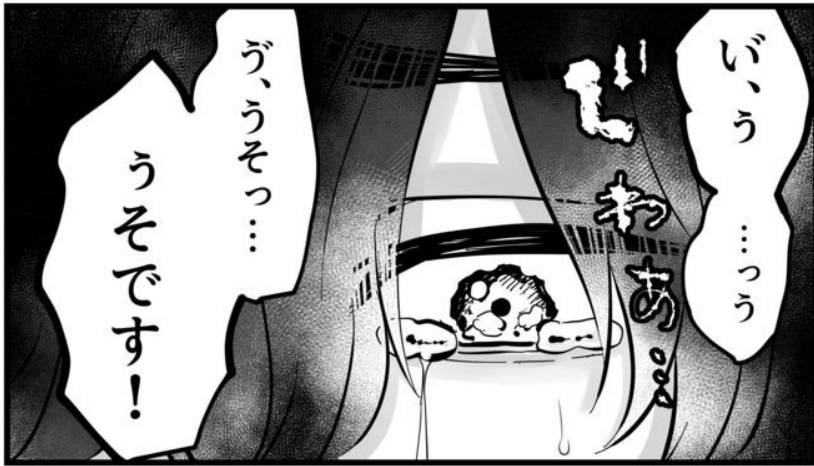


お祈り出来て偉いねえ…でもね

ぬ♡と♡お♡

これくらいで泣いてたんじゃあ…

信仰心足りないんじゃない？



び、う…っう

づ、うそっ…

うそです！



あは♡そうだよね♡
それじゃあ…♡

ぼ、ぼくっ…♡
が、がまん…♡

う、っ出じだいっ♡
けどっ…っ♡

がまんっ…♡
しま、ずっ…っ♡

だめっ♡



だめだっ…♡

だめっ♡

それはマジでっ♡

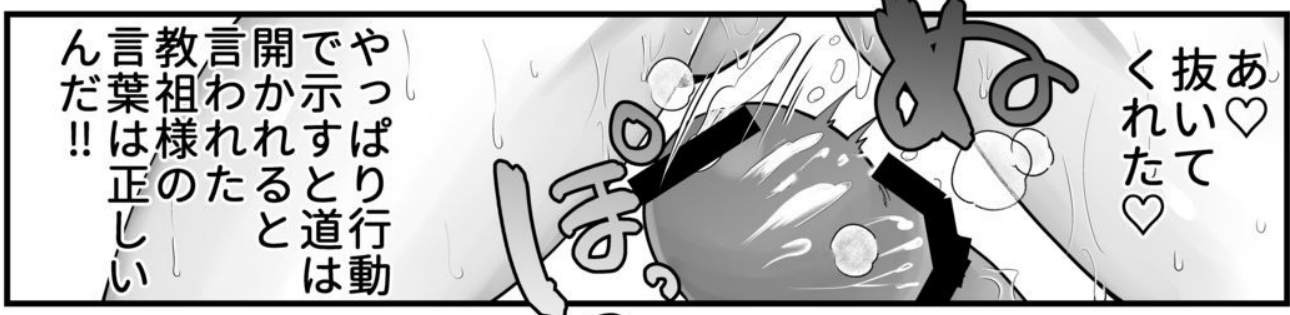
ご褒美にいっ…♡

だめだから♡



ガマンできる
良い子にはあ…♡





ぱっつぱつの金玉から
どんよりした陰の気
出てきてる♡♡

ふふ♡よしよし♡
魂は裁かれちゃう
かもだけどお…♡

ふふ♡♡

ふふ♡♡

おち●ぽは天国に
イこうね♡♡

射精るっ射精るっ♡♡
実りのない金で得た
そこそこの地位もっ
全部射精ちまうっ♡♡
あーまだ射精る♡♡♡

ふふ♡♡

ふふ♡♡

ふふ♡♡

ふふ♡♡

ふふ♡♡

このヌスを確実に托卵させてえ♡♡
生存本能のまま腰を振りたくって

ふふ♡♡

ふふ♡♡

ふふ♡♡

羽根を挽いで自分と同じ位置
まで落としくしてやりたい♡♡





にへひゅく♡
にへひゅく♡
にへひゅく♡
にへひゅく♡
にへひゅく♡

んっ♡

んっ♡

んっ♡

んっ♡

んっ♡

みひりゅひゃ♡



んっ♡

そんなっ導かれ方
したら…ぼく…♡

みちるん♡

んっ♡

んっ♡

んっ♡

んっ♡

ほおら

解放しちやお♡



んっ♡

押さえつけ
なくなっで…

んっ♡



いかな…

おっ！おっ！おっ！
ほっ！ほっ！ほっ！
おっ！おっ！おっ！
ほっ！ほっ！ほっ！

おっ！おっ！おっ！
ほっ！ほっ！ほっ！

おっ！おっ！おっ！
ほっ！ほっ！ほっ！

精子入ってぎでるの♡
挿入れた途端に出すの♡
反則♡♡♡



うお♡

まだっ♡♡
でてる♡♡！

カリでもがつちり
しがみついてる♡

でかすぎっ♡
ち●ぽしゅっ♡お♡

おっ！おっ！おっ！
ほっ！ほっ！ほっ！

おっ！おっ！おっ！
ほっ！ほっ！ほっ！
おっ！おっ！おっ！
ほっ！ほっ！ほっ！

あっふっ♡♡

チェリー丸出し
ピストンなの♡♡

ち●ぽおっきいから
擦れる範囲でか♡♡

祈りに^{すが}縋るのは
無^く駄^い♡♡

まぐわ
目合いがねっ♡♡ん、
二徹くんをっ
救ってくれるの♡

…っすく、うっ？

そう♡♡

私の中に溜まりに溜まった
不浄な欲を出せば全て
うまくいくから♡♡

おっ♡♡

ありがと…♡♡

おっ♡♡





……これ……!

ヒキッ

!

はまっ

はまっ

それはねえ
二徹くんがあ
本当に信奉すべき
ものの象徴だよ♡

オシタス♡

アッ
☆

あれ、僕ここに…

網膜に焼きつくまで
覚えておいて♡

……うん

から
空になるまで

ん。

正して
あげるから♡

何しに
きたんだっけ…

うあっ
みちるさ♡

ん♡
いい子は
ここに
挿入ろ♡

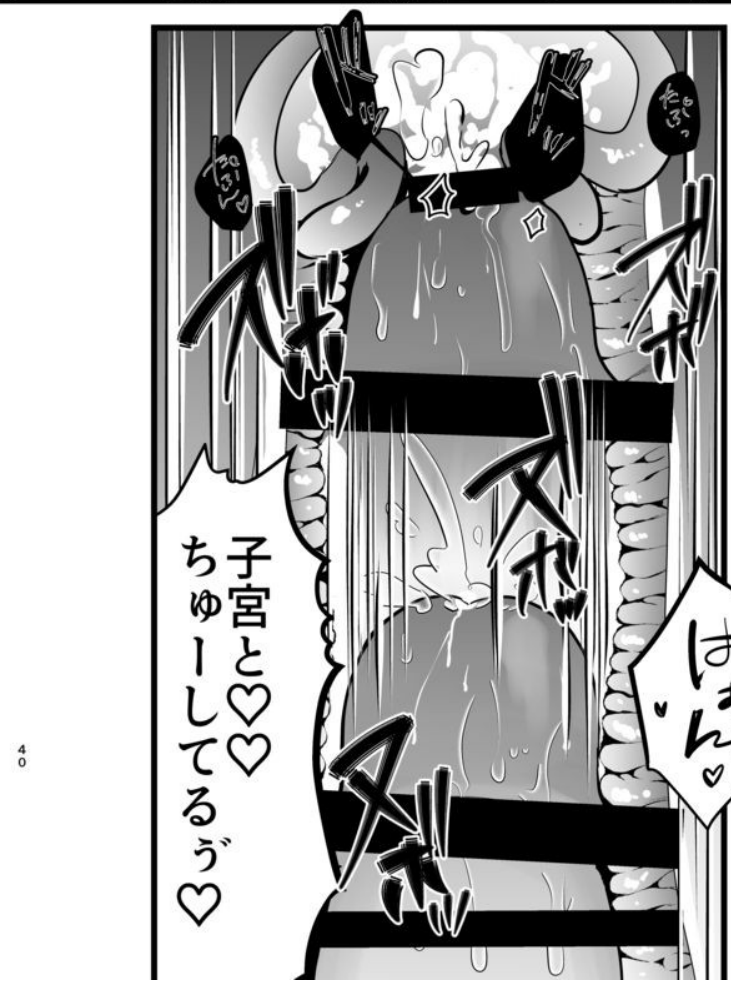
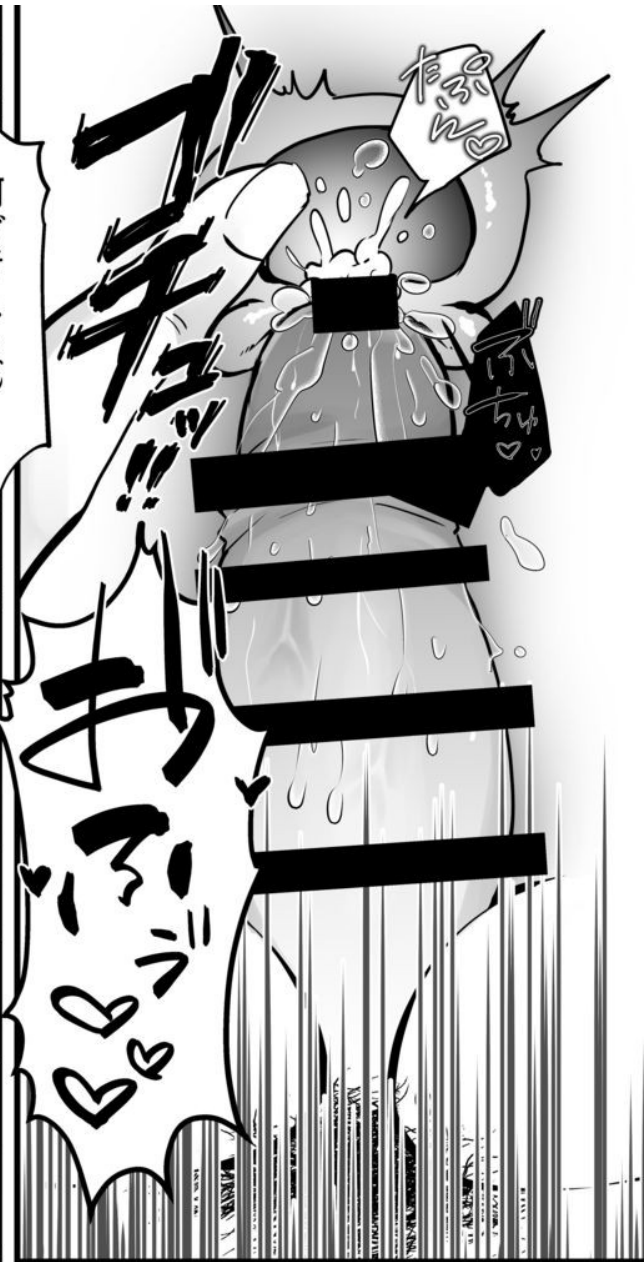
ねいっ♡

ねいっ♡

は、挿入る♡

ほあ♡

迷えるおち●ぽ♡
いらっしやあい♡
♡



このっ♡
私と繋がること
だけ考え…

何も考えらん
なくっなるっ!♡

おっ♡

おっ♡
おっ♡
おっ♡

おっ♡
おっ♡
おっ♡

このままっ♡
おち●ぽで信じる
もの間違えてえ…

ごめんなきい
ってしよっ♡

子宮と♡♡
ちゅーしてるっ♡

おっ♡
おっ♡
おっ♡

みちるさんが僕の
教祖様だったんだ♡♡





だめだろっ♡

ほっ♡お♡

奥まで…んお♡
挿入らねえとお♡

ほ、ぼくのっ修行にい
付き合ってくれるって
言ったのになっ♡

おっ♡



嘘だったん
ですか?!♡

嘘じゃな…

おほっ♡

子宮に罪深ちっ●ほ
叩き込まれるっ
なんてっ思っし
なかつた、からあ♡

お♡



まっで♡まっでええ♡
三徹くん待ってえ♡

おなかボコボコに
されでっ♡♡
ぐるじっ♡♡

高次につ♡
昇りつめちやう♡



僕はそこに
辿り着きてえの♡

みちるっ♡♡♡
イけっ♡♡♡
どろっどろの
種で孕んじまえっ♡



下剋上精子入っでぐる♡

孕めっ♡♡♡

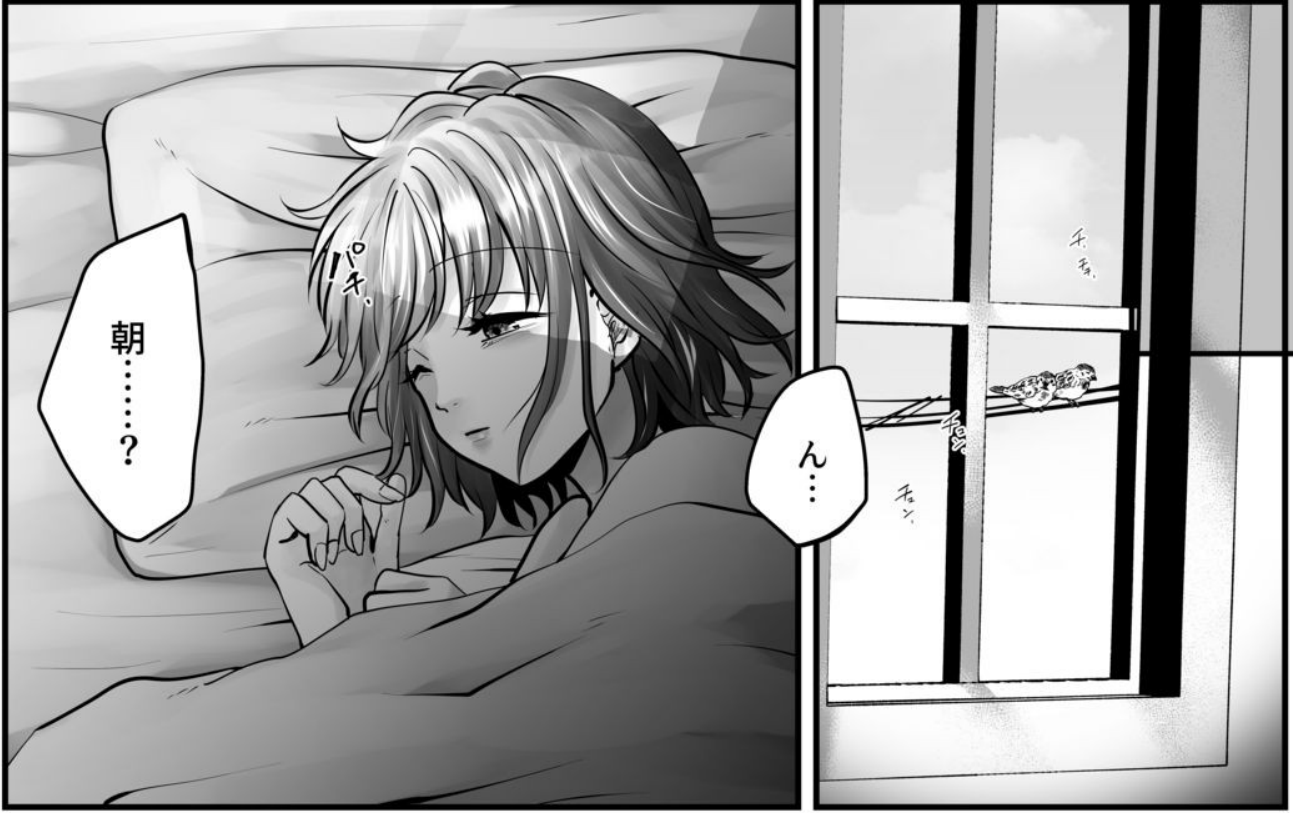
おっ♡♡♡

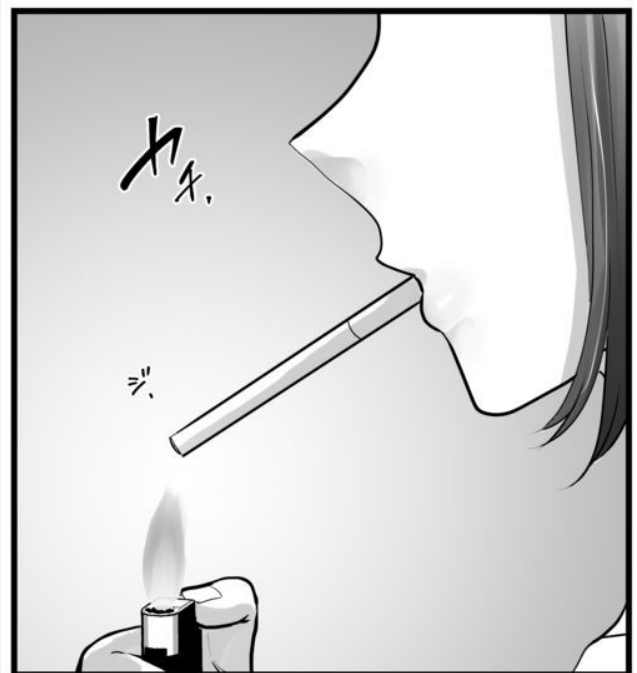
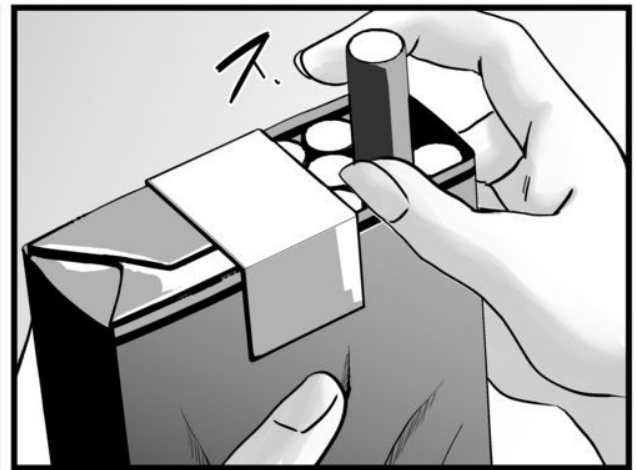
ほんとに孕む♡♡♡
陰にまみれた♡
赤ちゃんデキる♡

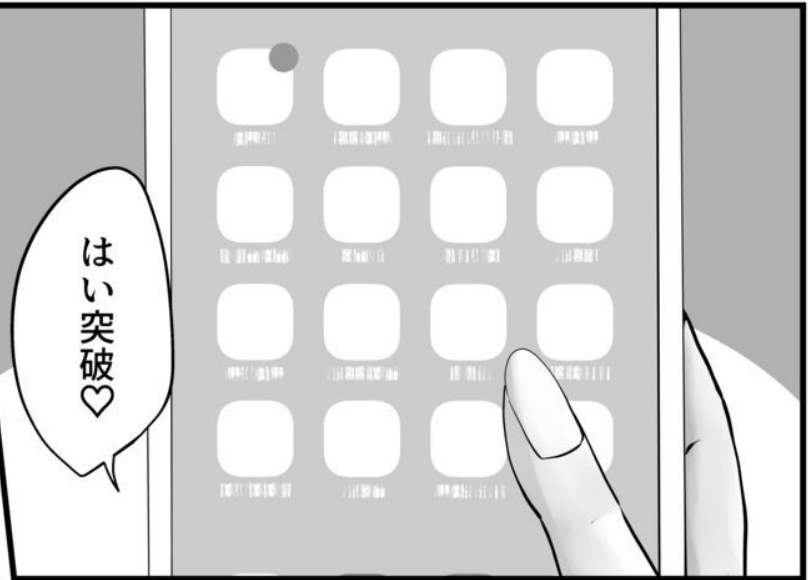
ここんなっ♡♡♡
イカされたらあ♡♡♡

おっ♡♡♡

頭下っ♡♡♡









んん、



私のスマホには連絡先は入れてあげない

二徹くんから連絡がなければ切れて
しまっくらいい薄いものでいい

明日も
よろしくね？

黒山羊くん♡

「迷える仔羊を手籠にして教祖になっちゃった話」

ピンポーン、チャイムが鳴り響く

インターホンカメラを見て日々鬱屈としていた私の日常が変わる予感がした。

「貴女は神を信じますか」

続々と悪寒のように感じるこの感覚、若い頃に何度も経験したこの感覚、覚える。

これは（臆キュンだ!）

妻鹿みちる、三十四歳。夫と結婚して8年目の執筆家。主に書いているのは官能小説。

ありがたい事に毎回重版がかかるくらいには読んでもらえているらしい

しかし半年ほど前に夫は5年程の海外勤務が決まり私も国外に出るのは億劫だった為に

別居生活が決まった。帰って来るのは年に一度か二度ほど。夫のことは愛しているけれどもでも…

「こっちにいる頃から体の相性は良くなかったんだよねえ…」

今のこの生活に不満がある訳では決してない。でもたまには刺激だって欲しくなるのだ、主に身体の。

みちるは両足を擦り合わせて手を股間へと這わせる。

いつも昼下がりのこの時間に無性に欲しくなり毎日のように自分で慰めるのが日課になっていた。

ピンポーン

ダイニングに通しテーブルを挟んで向かい合い、目の前の大柄な男に麦茶を出す。

「こんな、えと…僕、その、」

「ごめんなさいねえ？私いつも一人で退屈してて…話し相手になってくれたら嬉しいし、そちらの、『希信のまなこ』？のお話も聞かせてもらいたくって」

「……！う、うちの宗教に興味あるんすね！う、うちはその、教祖さまが——」

正直にいうと宗教になどまるで興味はない、正しくは目の前の青年に大変興味をそそられたのだ。

山羊沼二徹という青年は二十四歳、大柄な体躯に見合わぬ挙動不審さ、自分に自信がないのだろう丸まった背中。そのくせ全身の筋肉は均等にしっかりとついているアンバランスさ。今までに感じた事のない色気から男からそこはかたなく漏れ出していた。

（うちの教徒たちは毎日熱心に6時間祈りを捧げ、自分たちで育てた作物しか食べねえし水も全て希望の水を使って、あ、ちなみに毎月お布施をするんですが5万以上ならそれ以外は自由寄付だし、明朗で全然怪しく無エんです。希望の水は希望者には別途買取もできるんでこの機会にぜひ飲んで見てく、ださい!不思議と甘くて美味しいんです!それに…)

（ううん、普段から敬語は使い慣れてないんだろなあ）

慣れない敬語で一生懸命に説明する彼の姿は心を揺さぶられた、正確には性癖にささった。

話の内容は一歳頭に入ってはこなかったが一生賢明さと誠実さだけは伝わっただけになんだか面白くなってしまった。

「じゃあさ、私がそこに入ったらどんなメリットがあるの？」

三徹に笑顔で問い勝てるみちるの足先は三徹の脛をなぞる。誘っている事に気がついてもらえているのかいないのか三徹は頬を赤らめ汗をかき始めていた。

なにしろ三徹の女性経験は一人だけ、宗教の教えに従ってか初めて出会った女性教徒と覚えてもいない間の性交渉の一度だけである、女というものを知っているとは程遠かった。

「あ、の、…あ、あし、」

「ん～？それより三徹くんは偉いなあ、私なんか日がな一日家で仕事してるだけでもん、毎日熱心にお祈りしてたくさん頑張ってるし凄い幸せになっちゃうねきつと」

「……………っ！いや、そんな、…うう」

情緒は日頃の不摂生と毎日の催眠じみたお説教によりとっくに逝かれていたあのだろう、突然三徹は涙をぼたぼた流す。

こちらのしたことに何もいえない三徹に笑みを深めたみちるは確信した、おせばいける。立ち上がったみちるは三徹の横に立って自分よりも大きな男を見下ろして舌なめずりをしてから三徹の手をとり自分の豊満な胸に押し当てる。

「んなっ?!何してんだあんた!」

「いっっぱい頑張ってる三徹くんはね、私にご褒美あげようと思って。ね、直に触ってみたいくない？」

「そ、んなこ、とは…!」

「三人だけの秘密、つくろうよ、」

耳元に唇を寄せたみちるは甘い声で誘いをかける、大きく唾を飲み込む音が聞こえた。

*

ここは夫婦の寝室、三徹はみちるの膝に頭を乗せられおっぱいに吸い付いていた。

「うふふ、あ、♡良い子ねえ♡三徹くんはすごおく良い子♡あ、あ♡じょーず、♡」

「うぶ、んぶ、めが、さ、っ、…っその、すんませ、」

「謝らなくていいの、んっ、ほら、反対側もちゅーちゅーしようねえ♡」

「は、はぶ、んんっ、んう、っ」

「あっんっ、♡ふふ、ここに悪い気が溜まってるから泣いちゃったのかなあ？♡私がいっっぱいシコシコして悪い気がたあくさん出しちゃおうね♡」

胸を吸わせながら三徹の股間のジッパーを下ろすと勢い良く取り出すバキバキの長大なち○ぼ

ぼるんっ!(う、うわあ、でっかあ♡うちの人の三倍はありそう…♡)

手を添え抜くが小さな手では全てを掴みきれず無意識に亀頭攻めをしてしまい、手のひらでこねくり回されると呆気なくノーモーションで射精し、固形気味の黄ばんだ精液が撒き散らされる。

「…っ?!…っっ?!?!?!」

「わあ、くっさくて濃いねえ、♡これはまだまだ悪い気が溜まってるのかなあ♡」

「ぼくの、…道がみ、みつかんねえのも、」

「そう、ここに溜まった悪い気がのせい♡」

「じ、じゃあ、教徒から陰口言われるのも…!」

「ぜーんぶ悪い気が溜まってるせい♡」

何が起きたか分からない三徹は未知の快感に戸惑いながら胸から漸く口を離すと、ぼんやりした頭で質問を投げかける。みちるは三徹を横に寝かせて腿の上に乗リつつ質問に答えていく。納得は出来かねている三徹であったが段々とみちるが聖女めいたものに見えてきた。

(もしかしたら毎日祈っていたのは妻鹿さんに出会うための修行だったのか？ということは今日のこの儀式は教えであり試練なのか…?!)

もちろんみちるは適当なことを行っているだけでとんだ無責任な女である。

(童貞ではなさそうだけど経験少なそ♡適当にだまくらかしてこのち○ほいじめ抜きたーい♡)

サイドボードからローションと布を取り出して何をするか分からない三徹は息を整えるのと恥ずかしさでキャパオーバーになっている。肘を後ろ手について様子を見てると折りたたまれた布が亀頭にかけられる、その上からローションをドバドバとかけられその刺激にすら喉を晒す三徹。その様子を笑顔で見ながらベタベタになったローションガーゼへと手を添えて左右にゆっくり動かしていく

「うゝわ、！♡っおゝ！♡♡なゝ！?!なゝんゝ、♡♡これ、これだめゝっだ、！♡」

目を見開き腰を跳ね上げブリッジをする三徹。それでも亀頭の攻めをやめることはなく優しい手つきでぬちゃぬちゃと音を立てながら横方向にひたすら擦りあげる

「おゝっ！♡おゝうっ♡おほっ！♡♡めが、っさ、！！♡」

「みちるだよ、にてつくん、ほら、みーちーる、言ってみて？♡」

(これは！試練、試練なんだから！僕は今教えに忠実に射精しようとしてるんだからっ♡他人の奥さんにおち〇ぼシコシコされて喜んでるわけじゃねえから♡♡)

「み、みゝぢるゝさ、っ♡♡もゝ、むゝり！！♡♡ほおゝっ！♡♡それっそれづよゝいゝいい♡♡！！」

「お名前呼べて偉いねえ♡ほーら、悪い気がどぶどぶ出てきてる♡...あ、これで巻いたらもっといっばい出て行ってくれるかなあ？」

三徹の腕に巻かれた数珠を手にとってち〇ぼに巻きつけ始めるみちるの奇行に目を剥く三徹

「そ、それは！！おゝふっ♡教祖様からあゝ♡直々に洗礼を受けてもらった、んおゝ♡もの、でえっ、！♡♡...ごりごり、っあゝだるゝっ！♡♡」

「そうなんだあ？じゃあいっばい効きそうだねえ♡ほーら、ぶくーってしてきた♡出そうかなあ？」

「…っご、ごべ、なさ、」

「んー？ななに？よく聞こえない♡あ、数珠きもちい？もっとキツく締めてあげよっかあ♡」

笑顔でち〇ぼに巻きつける数珠の巻をもう一回強めていくみちる

「いゝひいっ！？♡♡ひぐ、っ、！♡そ、それやだ、っ！♡♡ぎもゝぢい、けどっ♡これゝっやだ！！はずしでっ、はずじでっくさ、！おおゝふっ！♡♡」

「そっかそっか、お祈りしてるんだね？♡お祈りしたら気持ちよーく精液出せるからねえ♡♡」

「ちがっむりゝっ！♡それむゝりっ！！♡だ、だしてえ、のゝっ！！♡み、みぢるゝざっ！♡♡ごべんゝっ！♡♡」

「あーあ、これくらいで泣いてたんじゃあ信仰心が足りないんじゃない？なんのためにいっばい時間とお金かけてるの？分からないから入る気失せちゃうなあ…」

「いゝっ、！！う、うゝっ、！！♡う、うそ、っ、♡ほくがまん、でぎるゝっ！♡♡ふう、♡！♡♡」

「あは♡そうだよねえ♡それじゃあ…」

言いながらみちるは服を脱ぎ捨てていく、キャミワンピースは胸だけを露出させてスカートはそのまま、下着だけを脱いで落とす。三徹の上にまたがって生ち〇ぼを膣に宛がった

「我慢できる良い子には…んっ♡ご褒美に悪い気を直接吸い上げてあげなきゃ♡♡」

「…っほおっ♡ま、までっ、！♡♡ちよ、ご、ごむ、っ♡孕んじまう、！だめ、だめだっ！♡♡」

ばちゅんっ！！思い切り腰を振り下ろすみちる

「ああんっ♡あは、すっごい奥までっ！♡んう、っ届いてるう、♡！」

「おおゝ~~~~♡♡♡♡で、つま〇こおっ！♡♡と、とけゆ、！ち〇ぼ溶けるゝうゝっ！！♡♡」

し、知らない、こんな感覚。初めての時に無かった！こわいしち〇ぼがいたい！苦しくて死んじまいそう。そんな感情が滑車の如く回っても興奮とは毒。女体の真髄に幹を太く実らせるからかぎっ、ぎっ、と珠を繋ぎ止める糸が悲鳴を上げて根元を食い破らんとしている。蜜滴れど精に飢える二律背反な粘膜でしゃぶられる度、唇が震えて咳が漏れ出てしまう。しぬ。多分これはほんとうに帰れなくなる。家にも魂も、だ。

「あは♡びっくんびっくんっってお腹で大暴れしてこわ〜い♡ねっ♡これ、外したら出ちゃいそうねえ？♡」

俗にいうあくまの、ささやき。いくら修練とはいえ人の妻を孕ませるような行為はほんとうに許されるのか？教祖様はイエスと頷くのか？わからない。大きく弾むおっぱいに気を取られている矮小な僕にはもう、なにもわか

らない。ただち○ぼの管が切れて駄目になる前にどうにかしたいという獣と同等の判断力しかないのだ。ちか、と明滅を起こす双眸の焦点を合わせ、己の唇を舐め――

「は、あゝっ♡ぐ♡うゝうっ♡うゝ〜っ♡♡はっ♡は♡外さな、いれゝ……」

「ふう♡はあっ♡あ♡太さ以外はだめだめばぶちゃんおち○ぼでおま○こ耕すのきもち〜♡ねえ、ほんとうは〜♡」

「ほおっ♡お♡お♡おっ♡ほんとおっ♡は♡あ、は♡は、は、外さないのがっ♡し、真実らからあゝ♡」

「強情な子お♡だあれも見てないんだし罪にもならないでしょ？♡私も隠してあげるんだから……♡」

「う、ぎゅっ♡♡かはっ♡は〜っ♡は、ひ♡そ、それでもおゝ……こ、これいじよ、おゝはっ♡」

ぎゅっ、と母親が子にする抱擁じみた締め付けなのに力一杯握られたようにしか感じない。すぐわれない。こんなにもいい教徒なんだからっ！救ってくれ！思わず胸元で指を結んで祈ってしまえばみちるさんが腰を止め、浮かしてくれた。行動で示すと道は開かれる……教祖様の言う通りだ。

「えいっ♡」

うねる肉の壺から解放されたのも束の間、鬱血し赤黒く染まりかけていた竿を戒める数珠が外れた反動で尿道が沸騰しきった種を汲み上げて一層大きく脈打った。ああ、もうみんな意地悪……。う、ぐ……っ♡♡へ？♡♡

「……〜〜〜♡♡あゝ？！♡あゝあゝ、あゝあゝあゝ〜〜〜っ♡♡と、生まれ♡ザーマン止まって♡むり♡だめ♡じ、じごく行き♡これほんゝとにあゝたま焼けちまうゝ♡♡」

「勢いすっご〜い♡ぱつぱつの金玉からどんよりした陰の気が出てきてる♡ふふっ♡よしよし♡魂は裁かれちゃうかもだけど、おちんちんは天国に行こうね♡」

「……は、っ……はあ……♡んゝんっ♡」

未知の快感は時として脅威だ。僕の意識という名のコントロールされたもの、金と引き換えに得た実りのないそこそこの地位、植え付けられた常識の全部が粘っこさとダマが消えないザーマンと一緒に射精る♡射精る♡まだでる♡あゝ一、でる……♡さっきのような迷いも一切ない、ただ求めるのは満足そうにこちらを見下ろす雌を確実に托卵させてえ。羽衣を挽いで自分と同じ位置まで墮としてやりただけでいっぱい。生存本能のなんともまあ、あさましいこと。

「ふふ、やぎじゃなくておおかみじゃない。童話かしら？」

「っ？！……ち、直視したら、慎ましくいれなくなるのに、どうして……」

「慎ましく、ね。閨でずこずこするなら要らなくない？♡目を背けてきたもの、ゼーんぶ解放しちやいなさ〜い♡」

「……み、みちるさん♡そんな手の引かれ方されたら、ぼく……っ！♡」

「っ♡押さえ付けなくたって逃げな……ひゃ、うゝっ♡カリでもしがみついちやって、可愛い♡必死ねえ♡」

重いものなど持てなさそうな真白い指が前髪を払ったからか、毛先で所々隠れるだとかぼやけた輪郭ではない彼女を片目が捉えた瞬間、馬を飼い慣らす体位から仰向けになるように倒してやった。上体を伏せ、僕の唾液で湿るたわわなおっぱいを胸板で潰してくっつけば華奢な線をした首に痕が残ってしまうのも忘れ、ただ嘔み。軋むスプリングも気に留めずばん、と肉の音を激しく鳴らしGスポットのざらつきを擦り上げた。

「ふ〜っ♡ふうゝ〜っ♡おま○こすることしか考えられね♡みちる、さ、♡セックスが祈るよりきもちいのいけなの♡」

「あゝんっ♡お♡チェリー丸出しピストンなのになち○ぼおっきいから擦れる範囲もでっか♡うゝ♡んおっ♡いっ♡祈りに縋るのはむ〜だ♡目合い（まぐわい）がね、三徹くんを真の意味で救ってくれるの♡」

おおよそ綺麗とは思えない嬌声混じりに吹き込まれる言葉が今まで聞いた説法のどれよりも染みてしまう。頬、鼻先、耳の全てが熱くて仕方がない。ほそい光を信じ、痩せ細った心が幸福感に満ちる。もしや、もしかしたら、僕の教祖は――

「え？すく、う？」

「ん、くうっ♡ほっ♡そ、そう♡私のナカに溜まりまくった不浄な欲を出せば全てがうまくいくんだよね……え、おっ♡♡いぐっ♡……はっ♡出ちゃったんだあ？♡また浄化進んだよ～♡えらあい♡」

「はひっ♡はっ、へ♡へっ♡あ、ありがとお♡ございます♡♡」

細まった瞳、頭を撫でる掌にへこつきが止まらない腰が止まる。やさしい。きもちいい。ずっと味わっていたい。膣に収まりきらない精がぶびゅ、と結合部から漏れ出る心地良さと同時に鉛が詰まっているような身体が軽くなっている。よく考えれば忙しさにかまけてヌキ忘れていただけの重さなのだが理性が欠けた状態では本当にそんな力があると信じてしまうのだ。洗脳とはかくも恐ろしい。

「んふふ♡まだ澱んでるなあ。朝まで修行（こうび）、しよ？♡」

僕の身を押しながら一緒に起き上がるみちるさんをぼんやりともやの掛かる視界で眺めていればぐぼ、なんて萎え知らずのち○ぼを引っこ抜く際の名残惜しげな肉壁の吸引が剥がれる刺激で息が詰まる。う、と呻く間にもこちらへ背を向けシーツにおっぱいを押し付け、臀部を突き出す——女豹のポーズというのだろうか。扇情的な光景に耐えきれずウエストに引っ掛かったワンピースのカーテンを雑に剥がす。これでも、もし何処がか破れたら弁償しますと祈っているのだ。一応。

「これ……」

恐る恐る腰に刻まれたタトゥーを指腹で撫でると擦ったそうにみちるさんの肩が震える。

「それはね、二徹くんが本当に信奉すべきものの象徴」

「このまなこ、が」

「そう。網膜に焼き付くまで覚えておいて」

「……うん」

みちるさんが宿している目に魅入る。おぞましさの中に美しさを拾えてしまう不思議なデザインに背を押され、雰囲気のない意味での女神様に思える。あれ？僕はここに何をしに来たんだっけ……。

「空になるまで正してあげちゃお♡はあ～い♡いいこは挿入ろ♡迷えるおち○ぼいらっしやい♡」

「おふう、うっ♡♡さっきみたいになんも考えられなくなる♡♡」

混乱をよそに迸る熱で持ち上がり続けるち○ぼが白濁が泡立つ雌穴へまた誘われればぶち、ぶち、と頭の血管が断たれる鈍い音が聞こえてきた。みちるさんの括れたウエストを掴み、快楽の名付けがされた導きに従うだけのひつじへと戻る。

「いいの♡私と繋がる事だけ考え……っ、うおっ♡♡そ、そお♡このままおち○ぼで信じるものを間違っ♡ご、ごめんなさいっ♡してしよ♡ね？♡え♡♡へっ♡へっ♡♡し、子宮とちゅうしてる♡♡」

「み♡みちるさ、ん♡とっ♡出会う♡の遅くて♡ごめんなさいっ♡♡神聖な♡ポルチオ様にぶっかけるので♡♡不義を許してくださいっ♡♡ん♡ん～～っ♡♡射精る♡♡」

古の話に六日ほどの交わりを経て人としての営みを知る者がいた——という本を読んだ記憶があるが、これでは逆だと思ふ。今の自分はもはや肉慾の化身だ。子宮口を亀頭で殴り続ける行動に囚われて、止まらない。このままほんとに六日吐き出し続けてえ。でもこれ以上他人の妻に手を出し続けたくない。……あ？今、変な音が、

「んほおっ♡？！♡おごっ♡あ♡あの人挿入ったことないとこまでぶち抜かれちゃ……っ、おっ♡♡お♡お♡？！♡♡掘削やば♡♡に、二徹くんの徳が高まっちゃう♡♡」

「あ♡りがとう♡ございます♡もっと高みに向かわせてください♡♡」

力が抜けたのか突き上げられていた臀部が落ちていく。逃げないで！もっと僕を清めてくれ！と焦るあまり、ガニ股開脚の体勢で伸びているみちるさん——否、教祖様にびったり被さってうつ伏せのまま狭い子宮の中へピストンをキメる♡

「お♡お♡お♡～～んっ♡♡ど、ど急所おっ♡馬鹿になりそうなくらい効く♡う♡♡生の気がどばどば出りゅ♡♡」

「っ、駄目だろ♡奥までがっつり挿入らねえとお♡♡みちるさん♡はっ♡あ♡ふ、あ♡っ♡ぼ、僕の修行（こうび）に付き合ってくれるって言ったのになっ♡♡嘘なんですかっ♡♡」

「かはっ♡ん、ぎいっ♡う、嘘じゃないけど♡し、子宮に罪深ち○ぼ叩き込まれる♡なんて思ってなかったから
あ♡おほっ♡ほっ♡お、ひ♡いぐっ♡いぐいぐっ♡♡」

ぬちゅ、とひたすらち○ぼを搾る襞を腰を回し攪拌すれば仰け反ろうとする背が沈む変化に煽られて、一回り竿
が膨れてしまう。横から覗いて見えた顔は赤みを帯びてお揃い。舌をでろ、と突き出すあれもなさに金玉が重
怠くなった。空になるまで本気イキさせたら幸せになるんだ♡教祖様に感謝♡

「あー……♡あ♡はあ♡ふう♡嘘じゃないならよかった♡みちるさんの身体が喜んでるって分かったしザーメン
上がってきましたっ♡♡」

「お`え♡お腹ずっとぼっこぼこにされて苦し……♡まって♡まってえ♡♡二徹くん♡待て♡高次に昇り過ぎちゃ
う♡♡」

「僕はそこに辿り着きてえ♡の♡♡みちるさん♡♡イけっ♡どろっどろの種で孕んじまえっ♡♡孕んでっ♡♡」

「下克上されてる♡♡こっ♡こんなにかされたらあ♡♡お♡♡お♡♡お♡♡ほっ♡♡ほん♡♡とに孕む♡♡陰に塗れた
赤ちゃん出来る♡♡あたまトぶっ♡♡いっ♡ぎゅ♡♡」

それっばい言葉を並べていたけれど、結局最初の卵子を食い潰したい欲求が鎌首を擡げて唇から零れていく。お
互いに螺子が飛んでいるお陰で覚えられないのが救いだろうか。いや、逃げか。目を剥いて腰部をかくつかせる
みちるさんのちいさな、ちいさな子宮に固形のごろつきが控えめになってきた精子をぱんぱんに注ぎ込んでから
ち○ぼを抜く。髪糸に滴る汗を拭ってから脱力した身体を横に向かせ、片足を肩に掛けた。僕はその後もひたす
らもやもやを大鳴きする教祖様へ吐き出して——意識が途切れた。おやすみを思う暇すらなかったと思う。

*

ちゅん、ちゅん。鳥の囀りで砂に沈んだような意識を手探りに掘りだし、痛む上体を起こす。昨日の情事の激し
さを物語る匂いや服の散り方に一種の芸術——己の次の小説のネタになりそうだと予想外の収穫に内心ガッ
ツポーズを取った。サイドテーブルから煙草を摘み、啜えた紙へ火を点し紫煙を吐きながら隣に横たい、危機感
なく未だ寝息を立てるかわいそうな山羊のジャケットを漁って胸ポケットからスマートフォンを掴むと躊躇な
く電源を付けてみる。

「ロックが掛かってたけど顔認証か。ツイてるなあ」

パスワードはパターンがほぼ無数と言っていいほどあるのだが、顔認証はというと……。

「はい、突破♡」

持ち主が近くに居るのなら究極のザル警備。アプリに情報を残すのは弱みになるし彼を上手く扱うならこれくら
い細かい関係のがいいだろうと電話帳を開いて、番号を登録しておく。名前はシンプルに妻鹿 みちるだ。きみの身
体の旨味を吸うだけ吸って、唆す最低な女。

「明日もよろしくね♡黒い羊くん」

彼の頬を撫でつつ、灰皿に燃えた草の死骸を落とした。

初版：2025.05

著者：原作 ；；(かなしい)／作画 春日たろう

サークル：非常口

